

2021年7月11日聖霊降臨後第7主日説教

アモス書7章7節—15節

エフェソの信徒への手紙1章1節—14節

マルコによる福音書6章7節—13節

来週の7月18日（日）聖霊降臨後第8主日から、公禱の礼拝再開と思っております。しかし、四回目の緊急事態宣言（7月12日から8月22日）が発令されており、また、高橋宏幸主教様より「主教教書（24）」も発行され、礼拝再開再検討の注意喚起がなされました。本日礼拝後の教会委員会で皆様の意見を聞き、検討・決定いたしますが、礼拝再開はもう少し先になると思います。

さて、本日の三つの聖書日課から、主なる神様による「召命」について学びたいと思います。旧約日課は、預言書の「アモス書」です。この文書を記したとされる預言者アモスは、専門預言者ではありませんでした。本日の7章14～15節に「アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた」とある通り、アモスは、牧者であり、また農民でした。

『聖書』において、預言者のあり方は様々です。元祖預言者といえるモーセは、主なる神様からの直接の召命を受けましたが、預言者であると同時にイスラエルの指導者的な役割を担っていました。サムエルも同じでした。アモスより後の有名なイザヤは、預言者集団を形成し、長期にわたり預言活動を行っていました。またエリヤは、預言者であると同時に、敵対するバール宗教の預言者集団と闘う預言者でした。また、宮廷の助言役的な預言者もいました。

アモスの活躍した時期は、紀元前8世紀ごろです。その時のイスラエルは南北に分裂しており、北イスラエル王国の王は、ヤロブアムであり、世界史的にはヤロブアムⅡ世と呼ばれています。この王は、列王記下14章24節に「彼は主の目に悪とされることを行い、イスラエルに罪を犯させたネバトの子ヤロブアムの罪を全く離れなかった」とある通り、聖書と預言者からは厳しい批判を受けています。しかし、一般の世界史的に見ると、北イスラエルの領土と国家の繁栄は、もっとも大きな時でした。一方、南ユダ王国の王は、ウジヤ王であり、別名は、アザルヤです。彼は、列王記下15章3節に「彼は、父アマツヤが行ったように、主の目にかなう正しいことをことごとく行った」とある通り、主なる神様に対しては良いことを行いました。ただし、一般の世界史的に見えると、国家の繁栄は特に目立つところではなかったようです。

「列王記」など聖書に記されてある、主の目の前になうこと、また悪とは何かといいますと、それは主なる神様を信じて、その神様に対して神殿祭儀を行うか否かです。悪いこととは、他の神様を信じて、他の神様に対して神殿祭儀を行うことが悪いことですが、主なる神様を信じていながらも、他の神様の

神殿や風習を容認してしまうこともいけないこととされます。

今日の視点からしますと、このような価値判断は、他の文化を認めない、多様性を認めない排他的な信仰の在り方のように思われます。確かに、この価値観に基づいて、人間が主なる神様の代理人のようにふるまった場合、そのようになると思います。しかし、聖書のこの価値観が示している事柄は、人間の価値判断で、人間中心にほかの物事を見るように、主なる神様を見てはならないということです。

人間の価値観で主なる神様を見るとは、自分の要求に応じて信仰対象を選ぶ、あるいは主なる神様と他の神様を同列に並べて、自分に都合のよいところだけを採用しようとすることです。それでは、人間は、思考を停止して、ただ主なる神様に従いなさいと命じているのかというと、そうでもありません。

この点が非常に難しいのですが、主なる神様が求めていることは、人間が自らの理解で、主なる神様の意志を理解し、自らの意志で神様に誠意を持って応えることです。なぜ主なる神様が、そのように求めるかということ、主なる神様自身が、人間を心から愛そうとされているからです。真の多様性に満ちた社会も、この愛から広がると思います。主なる神様以外のすべての存在は、平等に主なる神様に愛されているからです。

さて、この主なる神様の愛を様々な形具体的に示し、伝えることが「宣教」ですが、本日の福音書は、その「宣教」の働きを行うに際して、イエス様が指示をしている個所です（ここでは「宣教」と「伝道」との違いには立ち入りません）。

イエス様を受け入れなかった故郷ナザレでの出来事の後、イエス様は唐突に十二人を呼び寄せて各地に派遣します。ナザレの人々は、イエス様をよく知っているからこそ、人間的な思いでイエス様を受け入れませんでした。そのような出来事があったあと、イエス様は、宣教活動に弟子たちを遣わします。そして、様々な指示を与えます。それは、弟子たちの宣教活動が、人間の思いを超えるためです。

最初に、「**十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた**」とあります。二人であることにはさまざまな意味が込められていると思います。その活動が個人という枠組みを超え客観性を持つこと、また助け合い励まし合うことを通して一人以上の強さを持つことなどです。ことに、個人という枠組みをこえるということは大切です。イエス様に従う宣教活動は、自分のため・人間のために行うのではなく、主なる神様のために行うことであるからです。

次に「**汚れた霊に対する権能を授け**」とあります。これは、イエス様の宣教活動は、「言葉で教えること」と実際に苦しんでいる人を助けるために「奇跡などを行うこと」の両方であることに基づいています。それはすでに、福音書の最初の方、1章27節に「**人々は皆驚いて、論じ合った。『これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く』**」とある通りです。十二人はイエス様と同じ行動をとる

ことを期待されているのです。

次に持ち物に関する指示です。前半部は、持ち物についての注意事項です。「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず」とあります。「杖」は、羊飼いが使う道具であり、そこから牧会者の象徴という意味もあります。主教が持つ「杖」がその意味を示しています。また「自衛の道具」という意味もあります。但し、「剣」など相手を倒す道具ではなく、あくまで追い払う道具です。「パン」は食料の象徴です。食料を携帯するなということです。パン以外なら食料を山ほど持って良いということではありません。「袋」は入れ物であり、その言葉自体に特別な意味はありませんが、必要が予想される予備のものや、頂きものなどを携帯するための道具を持つなということでしょう。「帯の中に金」は、現代の旅行者もするように、襲われて大丈夫なお金を隠し持つということですが、予備のためにお金は持つなということです。

これらの指示は、イエス様が、宣教に旅立つに際し、通常旅に必要な備えをいっさいするな、と命じているといえます。この指示は、主なる神様がイスラエルに求めた生き方と同じです。すなわち主なる神様は、一般的な王国が備えようとする王や制度などを、イスラエルが備えることに否定的でした。それは、「サムエル記上」8章6節に、民が王を求める場面で、「裁きを行う王を与えよとの彼らの言い分は、サムエルの目には悪と映った。そこでサムエルは主に祈った」とある通りです。イエス様は、イスラエルが歩むべき歩みのように、十二人に求めているのです。

さらに二つことを命じています。「履物は履くように、そして『下着は二枚着てはならない』」です。最初の「履物」は、現代でいえばサンダルのような履物です。簡素ではありますが、裸足ではいくなということです。これはすべてを主なる神様にゆだねるといっても、最低限の人間として装いは守りなさいということです。なぜならば、過剰な装備で行くことを禁じてもありますが、必要以上に貧しい恰好を強調して、人々の哀れみを誘うことも逆に、人間的な装いになってしまい、宣教活動の本質からそれるからです（ただし、マタイ10:10では「履物も杖も持って行ってはならない」となっています）。「下着は二枚着てはならない」という言葉も同様です。「下着」という訳語は、誤解を招くことが多いのですが、肌の上にそのまま着る普段に着る衣服のことです。

「普段着」「肌着」などとも訳せるかもしれませんが、時代と文化が違うために、日本語に該当する言葉がありません。結局、「下着」には和服を重ね着するときを上着の下に着る衣服という意味もあるということで、「下着」に落ち着きます。衣服に関しても、予備を持つなということです。着の身着のままということばがありますが、イエス様は、そのままの自分の姿で、主なる神様にすべてをゆだねと歩みなさいと十二人に指示しているのです。

後半部分は、旅先での注意事項です。ここには二つの指示があります。まず、「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家に

とどまりなさい」とあります。これは、宣教活動で移動して、ある村や町に入った時に、次々といろいろな家を渡り歩くなということです。それは、最初に出会って受け入れてくれた家があれば、受け入れる家の状態がどのようなであっても、そこに留まりなさいということです。人間的思いからすれば、物質的・経済的あるいは精神的にもより喜びを持って受け入れてもらえる家の方がよいとか、努力が最大限に報われるような状態の家がよいとか、村や町全体に宣教の効果が表れる家がよいとか、いろいろと考えてしまうかもしれません。イエス様は、そのようなことをするなと命じているのです。次は「しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようもしない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落とさなさい」です。「足の裏の埃を払う」とは決別の証とも言われますが、イエス様に派遣されて神の国を宣べ伝えたにもかかわらず、もしある人や集団が受け入れなかったとするならば、徹底して決別しなさいという命令です。この言葉は少し厳しすぎるようにも思えます。しかし、この厳しさは、宣教活動が人間的な思いを超えている事柄であるからです。

今日の私たちにとって、本日の聖書箇所はどのようなことを示しているのでしょうか。それは、人間の思いを超えることの重要性です。教会は、様々な人の思いが集まる場所です。様々な方が、いろいろな思いと目的で、教会を舞台にして活動を行うからこそ、教会の活動が活発になります。わたしも日曜日にしか扉のあかない教会よりも、毎日誰かが訪れてくれる教会の方が、より広く神様の愛をいろいろな人に伝えられると思います。しかし、教会は、単なる広場ではありません。もちろん、このように語ると、なんと閉鎖的な教会観だと叱られるかもしれません。また、教会は敷地も建物も、誰でも来られる広場のようだという人もいます。しかし、それでは教会が、24時間、誰が何をしてもよいフリースペースでよいかということ、そのように考える方も多くはないと思います。それでは、教会は、教会にふさわしい（と思われる）活動にとって、地域に必要な（と思われる）活動にとって、自由な広場である。これが正解かということ、これがまさに人間中心の思いです。

コロナ禍が始まり2回目の夏を迎えるにあたって、世界中の教会の多くの教会が、従来の活動の多くを停止しています。公祷の礼拝すらも停止しています。それは、教会の活動とは何か、そのことをわたしたちは、21世紀が5分の1過ぎた時点で、あらためて問われているのだと思います。さすがに、礼拝よりも先に、何かの活動を再開ということはないかもしれませんが、その礼拝自体も、今までのままでよいのか、そこに人間の思いによるものはないかが問われていると思います。

コロナ禍があっても、今まで通りに戻ることも大切です。しかし、コロナ禍があったからこそ、今まで以上に主の愛を示すことができる教会になればと思います。そのためにもう少し、ソーシャルディスタンスは保ちますが、心を合わせて、ご一緒に祈り続けて行きたいと思います。